請願審査 届け！市民の声

皆さんの要望を議会はこう審議しました

セイガンハ・ダレデモ・ダセマス

６月定例会では、２件の請願が提出されました。市民厚生常任委員会、総務文教常任委員会で審議され、以下のような結果になりました。

■地域住民の健康を守り、ドナーの骨髄提供しやすい社会環境づくりを図る「骨髄バンク・ドナー助成制度」創設を求める請願書

全会一致 採択

請願者

特定非営利活動法人　骨髄バンク命のアサガオにいがた　会長　丹後まみこ　燕支部代表　湯川香代子

【請願の内容】

移植希望者の９割は白血球の型（HLA）が適合しドナー候補者が見つかるが、移植に至るのは６割弱というのが現実。提供者は、入院や検査などで１週間程度、学校や仕事を休むことになり、経済的な負担など簡単に時間をつくれない事情がある。このような方々にも経済的な心配がなくドナーになっていただけるように支援するのが「ドナー助成制度」。燕市では、骨髄移植が受けられないまま残念な結果に終わった患者が多くいる。骨髄移植の促進、患者の生きる希望のためにも「ドナー助成制度」を早急に創設してほしい。

命のアサガオ

花ことば 愛情の絆

【審査結果】

市民厚生常任委員会で審査、全会一致で採択後、本会議においても全会一致で採択しました。

採択した請願は市に送付して、処理の経過と結果の報告を請求しました。

「命のアサガオ」と骨髄バンク

皆さんは「命のアサガオ」をどこかで聞いたことがありますか。これは、当会会長丹後まみこの次男光祐（こうすけ）君が育てていたアサガオです。

平成５年、光祐君は小学校に３ヵ月ほど通学しただけで、白血病で再入院、骨髄移植を受けられないまま、９月に亡くなってしまいました。お母さんはやりきれない気持ちでいっぱいでした。ふと庭を見ると薄いピンク色のアサガオが咲いていました。光祐君が短い学校生活の中で育てたアサガオでした。その種を育てることで「光祐の命をつないでいこう」と思いつきました。命のアサガオと名づけられた種は、骨髄バンクとともに新潟の子どもたちから全国各地、海外へも広がっています。

一粒の種から本や歌が生まれ、映画もできました。光祐君のように骨髄移植を受けられず、生きる「チャンス」もないまま、生きたくても生きられない子どもたちがいます。

このことを伝え、自分の命も人の命も大切にし、一生懸命に生きてほしいと思っています。

湯川香代子

左：同会副会長の湯川香代子さん（南４丁目）
右：同会理事の金子和子さん（吉田神田町）

■小学校３年生以上の35人以下学級の着実な実行義務教育費国庫負担制度２分の１復元に係る意見書の採択を求める請願

全会一致 採択

請願者

新潟県教職員組合西蒲燕支部
支部長　内山谷寿夫　燕班班長　林　裕子

【請願の内容】

1. 国に対して国の財政負担と責任で35人以下の少人数学級の着実な実行。
2. 将来を担い、社会の基盤づくりにつながる子どもたちへの教育の機会均等と水準を維持・向上するために教育費国庫負担制度を現行３分の１からもとの２分の１に戻すことを求めるもの。

【審査結果】

総務文教常任委員会で審査、全会一致で採択後、本会議においても全会一致で採択されました。

採択した請願は「意見書」として、内閣総理大臣・内閣官房長官など、関係機関に提出しました。